

## 「障害者は子どもを産むな」という 優生保護法の影響に抗いながら ～障害者の結婚や出産の現状～

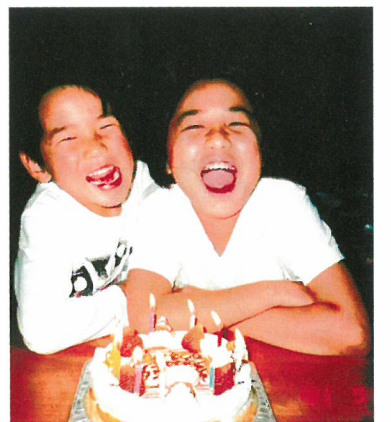
岐阜・脳性まひ当事者 小森淳子



### 卵巣も子宮も不要？

「初潮をむかえて、母に『こんなもの、あなたに必要なから手術すればいい』と言われ、『それだけは嫌だから、ちゃんと自分で始末するから』と泣いて頼みました」。私が有志の仲間と開いている、子育てにおける差別と偏見の体験を語り合う会「優生保護法とわたしたちの子育て」で、脳性まひの女性が語ったことばです。私たち障害のある女性は、自分のお腹におさまっている臓器でも、泣いて懇願しなければ、卵巣も子宮もつことが許されないので。

私にも同様な経験があります。体力の差もあって、私は三歳下の妹と同じ頃に初潮を迎えました。妹は、お赤飯を炊いてお祝いされましたが、私は母に嫌な顔をされただけでした。高校に入るとすぐに月経は止まってしまいました。母は、「だいじょうぶ？」とも「病院に行こうか」とも言うってくれず、私が自分で病院に行こうと思うまで、4年もの月日が流れました。そのときは何とも思わなかったのですが、自分の娘が思春期を迎えたとき、思ったのです。母の無関心さは親としてありえないと。



2人とも、生まれてきてくれてありがとう！

病院に行くと、酷い卵巣嚢腫ですぐに手術しなければいけないと言われました。両親はもちろん、私自身も卵巣を全摘されても別にいいかという感じでした。それくらい私のなかでも、結婚も出産も自分とは関係のないものだったので。

しかし私の主治医は、9時間もかけた丁寧な手術の後、「将来、すてきなことがあるかもしれないから、卵巣は二つとも残しておいたよ」と言ったのでした。私の生殖機能を肯定してくれる人もこの世界にいるんだと、とても驚きました。

### 結婚を反対されても許されても

私は、その数年後、いっしょに暮らしたいという視覚障害のある奇特な男性に出会いました。当然のように、両方の両親は結婚に反対しました。私の両親は、

彼の障害に遺伝的要素がないとは言えないこと、彼の両親は、私の姿が彼らのルッキズムには耐えがたいことが反対する理由でした。はじめて親族に会ったとき、「なぜ、わざわざこんな醜い人と結婚するのか」と目の前で言われたことを、今でも昨日のことのように覚えていますが、でも、恋愛というものは、反対されればされるほど燃え上がるのです。私たちは、「それは障害者差別じゃないか」と自分の親を糾弾して、説得を始めました。今から思うと、反対されているときより許されてからのほうが大変だったかもしれませぬ。「許してやったんだから」を枕詞に、義父母は私たちを事細かにコントロールしようとするようになりまして。特に、障害者で女性である私にたいしては、弱くて劣った存在だから、簡単に言いくるめることができると思っただけです。

### 子育ては自己責任？

1年後、元気な女の子を自然分娩で無事出産しました。私は、上肢の機能障害が重く、左手は全く使えないので、生まれた赤ちゃんのケアはなかなかうまくできなくて、子どもを傷つけてしま

のではないかと不安に駆られました。実家の両親からは「どうして、普通の女の人のようにできないのか」と言われ、いつもは「そんなことできたら、脳性まひじゃないよ」と言い放つ私も、そのときは反論できませんでした。世間を敵に回しても自分で選んだことなのに、思うようにできない自分がいなくてどうしようもなかったからです。

それに追い打ちをかけるように、義父母や親せきから「母親失格。3歳になるまで実家に預けて育ててもらいなさい。子どもに触ってはいけない」と言われましました。このときほど「この世から消えてしまいたい」と思ったことはありません。しかし、夫と話し合い、すごい確率でせつかく障害者のもとに生まれてきたんだから、障害者らしく育てていこうということになりました。子育て支援などまらでない時代でしたが、ヘルパーさんや保育園、学生ボランティアやママ友たちの手を借りて、私の子育て支援ネットワークをつくっていききました。

そんな子育てが楽しくてたまらなくなり、4年後男の子を出産しました。妊娠がわかったとき、周囲から言われたのは「なんで、二人も産むの？ あなたは二

### 自分らしい子育てを求めて

語り合う会で出会った仲間と確認するのは、「私たち、本当にいろんなものたたかってきたよね。だからこそ、子育てを楽しんできたよね」ということ。自分らしい子育てが、子どもをギュッと抱きしめてパッと放す、主体性を尊重した子育てにつながったと思います。

あきらめずに、やりたいことを自分で選択して生きてきて良かった！

(こもり じゅんこ)



おにぎりをほおぼる真剣な顔の2人